

# 地域資源を発掘・創造・発信する実践的研究

## ー 山口とファッション・まちづくり・国際交流 ー

研究代表：水谷由美子\*

磯部素男・片山涼子・永留靖洋・倉田敏生\*\*

西脇末美・岡部隆則・森田聖士\*\*\*

キーワード：地域資源 地域文化創造 山口 ファッション まちづくり 国際交流

### I はじめに

山口県立大学における筆者の研究室では、地域資源を生かしたファッションの創作と発信、まちづくり、そして国際交流という研究領域を、一つのテーマの下で統合させた研究・創作の実践をしてきた。特に、2008年度は研究室スタッフの多様な資質、関心、分野そしてそれぞれの問題意識、さらに研究創作の可能性などを検討し、本論で示すような研究・創作を実施した。

研究代表である筆者は実践的研究の企画・プロデュースの中心的な役割を果たし、全体のディレクションを行った。つまり、研究・創作のコンセプト構築および資金調達から多岐に渡る実践を統括したものである。

運営については研究室スタッフとともに実施した。本論で取り上げている内容は、1999年から本格的に始まった産官学連携事業「やまぐち文化発信ショップNaru Naxeva」の経緯と繋がっているの、まず、次章ではこの約10年間の研究創作の中で、地域資源の発掘・創造・発信に重要な役割をしたものについて検証し現在の問題意識や方法論などにどのように関連しているのかを明らかにする。(文責：水谷)

### II 「やまぐち文化発信ショップNaru Naxeva」からの研究創作の経緯

1999年に開始された産官学連携事業「やまぐち文化発信ショップNaru Naxeva」は2002年3月まで実施された。これは、まず筆者がそれまで実施してきた地域の創造的活動の連携への期待と行動を、より具体的に体系的に実現する第一歩になった。同時に、地域資源を生かす創造活動という視点が、産官学連携事業の中で共通のコンセンサスと課題になった。

ここでは特に山口県繊維加工協同組合とともに、

ジャパン・ファッションデザインコンテストin山口を2000年から開始したことが大きな成果と言える。なぜなら、このコンテストは2001年から素材テーマをデニムに限り、デニム製造企業の素材提供を得て実現されてきたこと、そして、第9回目を迎えた今年のショーでは、全国のファッションデザインを学んでいる多くの若者に、デニムと山口の関係について強い印象を与えることになったからである。同時に、山口県内の大学や高等学校においても、学生の自発的なテーマ設定として、デニムが重要な素材になってきた。デニム素材の産地ではなく、デニム加工の産地において、デニムファッションの発信地としての地域の期待と関心が高まってきたことは大きな成果である。

さらにデニムをテーマにして、2000年以降に実施した大きな事業には、2006年に山口県で開催された第21回国民文化祭・やまぐち2006のファッションフェスティバルがある。テーマを「シュル・ジャポニスム宣言～デニムファッション!世界を翔る～」とした。この国民文化祭でのファッションフェスティバルが契機となって、地域創造のプラットフォーム(連携基盤)はより強固なものになった。

具体的には、山口県や山口市などの行政機関、アパレル産業界(山口県繊維加工協同組合など)やデザイン業界(財団法人山口県デザイン協会)、山口商工会議所や山口市商店街連合会および各商店街組合、高等学校、専門学校そして大学等の教育機関さらにアート・マネジメントのNPOなどとの連携が強くなって来ている。

特に、上記国民文化祭のファッションフェスティバル推進委員会では、「シュル・ジャポニスム宣言～デニムファッション!世界を翔る～」のテーマの下で、デニムを中心に5つのイベント(1.街じゅうデニムファッション&アート 2.「日本の祭ー藍とデニム

\* 山口県立大学大学院国際文化科学研究科教授

\*\* 山口県立大学大学院国際文化科学研究科2年

\*\*\* 山口県立大学大学院国際文化科学研究科1年

／伝統と現代 -」展 3.モーリ・マスク・ダンス Part12「BLUE MOON」 4.シンポジウム「シュル・ジャポニスム宣言～デニムファッション！世界を翔る～」 5.ファッションデザイン・コンテスト Under18) が実現した。

筆者は委員会の委員長として、以上の企画を主に担った。結果として従来のファッションショー実施における連携をはるかに超えた関心と参加が得られた。なぜなら、国民文化祭は約50年に一度各県に回るものということで、イベントなどを通じて非常に強い関心が一般市民の間で起こっていたからである。それ故に、ファッションによる創造活動やまちづくりに関する参加などを通じて、民の存在が、産公学に加えて創造的プラットフォームにおいて重要な位置を占め始めてきたのである。それ以後、筆者の企画では産公民学連携を非常に強く意識しはじめたのである。

そして2007年には、山口県立美術館を中心に結成されたHEART2007のプロジェクトの運営委員会委員長を務めることになった。その年のはじめに研究創作テーマに農業をキーワードとして考えていたものが、HEART2007では「アグリ・アート・ツーリズム」のプロジェクトとして結実した。

これまでファッションショーを始めとするいくつかのプレゼンテーションでは、地域の自然、人物、文化、歴史、芸術などの資源が発掘された。言い換えれば、地域で特に関心が払われて来なかった資源、あるいは興味を持たれて来なかった資源に、イベントを通じて新しい光が当てられ、地域の人々に新しく地域資源として認知されるようになったのだ。以下では、2008年に実施した事業の中で、ファッションショーにおいて注目した「デニム」「ジャポニスム」「北海」「クリスマス」や、まちづくりの「大内文化」、国際交流の「中国」などをキーワードにした実践的な研究創作活動について記述し、その意義について考察をする。(文責：水谷)

### Ⅲ 伝統的な地域における地域未来構想を三次元コンピュータグラフィックス(3DCG)で表現する企画・プロデュース

#### 1. 大内文化まちづくり情報発信事業「三次元コンピュータグラフィックスで表すちーと未来の山口」

##### (1) 事業実施の背景

山口市の文化政策の大きな柱の1つである「大内文化まちづくり」は、平成6年に行政と民間による「大内文化まちづくり懇話会」が発足して以来、様々な研究や活動が進められてきた。

平成12年策定の第五次山口市総合計画に「大内文化まちづくりプロジェクト」として施策が設定され、平成15年には大内文化まちづくりを具体的に実現するための実施計画「大内文化まちづくり推進計画」が策定されている。この計画において「大内文化まちづくり」とは、「大内氏が行なったまちづくりを基盤に、その歴史と文化を伝え、新しいものとの融和をはかりまちの個性としてこれからのまちづくりにいかしていくもの」と規定されている。そして(1)ひとづくりと誇りのもてるまちづくり(2)活力あるまちの再生を目標として歴史、文化、教育、建築、観光、産業など多岐にわたる事業を展開することとしてある。

筆者は山口市の職員として、平成15、16年度と大内文化まちづくりに携わってきたが、多分野にわたる事業展開で将来まちがどのようなになるのか？将来のまちの姿を具体的に示して市民と共通認識するべきではないかとの意見を多く受けてきた。

そして筆者は大学院においてまちづくりを学ぶ機会を得たことから、大内文化をより具体的に施策事業に反映させるまちの姿を提案することとした。

##### (2) 提案の趣旨

山口市では、厳しい財政状況下において、地域産業の活性化や山口市を牽引するような新産業の創出、少子高齢化が進む中での教育・福祉問題、個人の生きがいの創出などの課題を抱えている。

一方目を外に向けると、欧州やアメリカ、国内でも金沢市や横浜市などで「創造都市」という新しい都市モデルが都市政策として取り入れられている。

都市とは、常に人々が入り出し、多様な人が出会い、異なる文化の接触により新しい文化が創られる場である。

21世紀に入り、日本の多くの地域において進む企業倒産や失業者の増大、犯罪や自殺者の増加などの社会不安の中で、中央に依存しない自立した地域社会を作っていくために、こうした都市の機能に着目し、創造的な市民と都市が持っている力により、地域を再生しようというのである。

この「創造都市」の具体的な事業の展開例としては、芸術家や芸術団体への支援、映画・音楽・ファッションといった若者向けの芸術文化産業に対する支援、創造的なアイデアや仕組みを取り入れた伝統産業の振興、文化芸術活動を通じた福祉施策の実践、荒廃した地域を文化によってクリエイティブな場に変える取り組み、創造産業(後述)の振興など、文化芸術から都市計画、産業、福祉といった多岐にわたる面において

事業が展開されている。

わが国においては1970年代以降、「文化行政」が社会教育の一部から市民の生活全般に渡る「総合行政」として理論付けされ、山口市においても「文化的視点を取り入れた施策の推進」が試みられた。これは「大内文化まちづくり」においても同様であったが、実際には文化芸術的なものを他分野の施策事業と関連させることは難しく、山口市の場合は充分な成果を挙げたとは言い難い状況であったと感じている。

文化や産業分野において創造的なまちを目指す山口市にとって重要なことは、文化とまちづくりを結びつけるためのしっかりとした理論を持つことであり、そこには山口市ならではの文化・芸術との関わり方が存在しなければならぬのではないだろうか。

こうしたことから、この3DCGでは、前述の創造都市モデルにおける「創造性」こそが山口市の「文化的視点を取り入れた施策の推進」の土台となるものと考え、創造性を涵養する装置としてまちの姿を提案することとした。

### (3) 目的

創造都市においては、「創造性」が社会の抱える諸問題を解決する手段であり、その地に暮らす人たちの“創造性”がまちを作っていくという考え方であることから、創造性を涵養するための様々なまちの仕組みを3DCGに取り込んだ。具体的には、文化による産業興し(匠のまちや創造産業の集積、商店街との連携、山口情報芸術センターを中心とした新産業の創出)、歴史や自然との調和(一の坂川等)、あるいは創造性あふれるひとの育成などである。

### (4) 事業実施の方法

#### 1) 事業主体

この事業は、平成19年度に民間が行なうまちづくりの活動に対して山口市が助成する「大内文化特定地域活性化事業補助金」制度に申請し採択されたものである。事業主体は、山口県立大学水谷由美子教授の研究室のもとで山口文化創造研究会を立ち上げ、本会において具体的なまちの姿を調査・検討していった。

また3DCGの制作は、過去に研究室の修士生の修士作品(大内館をコンピュータグラフィックスで再現したもの)の制作協力者、石田剛氏に依頼した。石田氏は地元松江市において地域資源をいかしたまちづくり活動などを積極的に展開している。

#### 2) 手法

画面上で、自分が鳥になったようにまちを上空から俯瞰し、特に創造都市として重点的にアピールする部

分は、3DCGとは別に具体的なイメージ図を描き、空間を移動しながらその場所(その絵)にズームインしていくような方法で表現した。

#### 3) 提案内容

3DCGで網羅したエリアは、山口市の大内地区(堅小路、大内大路)を中心に、一の坂川や商店街さらに山口情報芸術センターを含むエリアとした。

ルートについては、かつて大内氏の本拠地「大内館跡(龍福寺)」があった場所で、山口市の歴史・文化の源でもある大内大路を起点とし、サビエル記念聖堂からのラインと合流させることで異文化を取り入れた山口の特徴とその国際性(異質なものを受け入れる土壌)を表現した。

その後、幕末～昭和にかけて宿場町や商家が軒を連ねた堅小路を横切り、一の坂川から川沿いを下り、商店街(アーケード)と合流するルートで文化を通した自然や人とのふれあい・賑わいを表現し、山口情報芸術センターへと繋げることで、将来の山口情報芸術センターにおける山口固有の文化の創造と発信への期待を込めた。

#### 4) 3DCGに取り込んだ具体的なまちのイメージ

##### ①大内文化を生かしたまち

山口市は大内氏の特質から、まちなかに城郭ではなく教会を持つ非常にユニークなまちと言える。特に大内氏の本拠地であった大内大路や堅小路エリアでは、こうした個性的な歴史性や進取的な文化性を景観やサインに取り込んだまちを提案する。②の提案とあわせ、歴史・文化、産業によって人の交流が生まれる場、そして創造の場と位置づけた。

##### ②職人の世界が展開されるまち

堅小路エリアは山口市の“大内文化まちづくり推進計画”において「匠のまち」と位置づけられており、歴史を伝える伝統産業と、これからの山口のブランドとなりうる可能性を持つものづくりの職人が集積するエリアとした。

海外でも通用するようなブランド力を持つ製品を育てる「ジャパン・ブランド」づくりが各地で盛んになっている。安価な労働力を背景に発展してきたアジア諸国との共存共栄を図るため、日本はもう一段次元の高いものづくりを目指すべきである。具体的には、デザイン、ソフト、文化芸術を加えて付加価値を高めたものづくりを行うことが必要である。

##### ③生活とアートが交差するまち

一の坂川沿いを西京橋から下流にアーケードと交差するまで下るエリアをゾーニングする。このエリアは、



自然（一の坂川）とまち（商店街）が文化芸術によって結び付けられることで、人々の交流が盛んになり、そのにぎわいの中に文化的なものや創造力をかきたてられるものが生まれることを意図している。

#### ④山口市の文化的価値を創造し発信するまち

山口情報芸術センターではこれまでもアーティストが山口に滞在しオリジナルの作品を制作、公開している。このセンターの創造機能をより活用することで、市民を巻き込んだ創造活動が展開され、地域資源を生かした山口オリジナルな文化が創造される場所とする。また、センターでの芸術文化創造活動が盛んになることに合わせて中園町周辺に様々な創造産業が集積し、産業クラスターが形成されるとした。英国の文化・メディア・スポーツ省は創造産業を「個人の創造性や技能、才能に由来し、また知的財産権の開発を通して富と雇用を創出する産業」と定義し、広告・放送・デザイン・編集、批評、報道・映画、ビデオ産業・美術、イラストレーション・ゲーム開発・手芸・音楽産業・舞台芸術・出版・ソフトウェア開発、コンピュータサービスなどを創造産業としている。

### 2. 展覧会“ちと未来の山口”と毛利臣男の原画展について

#### (1) 展示会の概要

これまで作成されてきたまちづくりの計画や提案は、その文章の作成に多くの力が注がれて、それをいかにわかりやすく伝えるかの工夫が足りないことが多かった。そのため計画等があっても十分に市民に伝わっていないことがあったが、この度の文化施設を使つての展示は、成果物をより多くの人に効果的にアピールする方法として考えたものである。

また、この3DCGは、まちづくりの提案という側面とともに、3DCGそのものやその中に埋め込まれた絵画自体を芸術作品と位置づけている。これは作品として文化施設において展示することで鑑賞してもらう対象をまちづくりに関わっている人たちだけでなく、美術や絵画に興味のある人にまで拡大しようという意図があった。

#### (2) 展示内容について

- ・スクリーンを使った三次元C・G映像の投影と説明。
- ・毛利臣男氏が山口市内の職人のイメージを「山口職人絵」として描いた原画8点の展示
- ・山口の日常生活で自然に耳に入ってくる様々な音を展示内容に合わせて会場内に流す

[期間と場所]

5月21日（水）～6月1日（日）・・・C・S赤れんが

1階ホール

10月4日（土）～5日（日）・・・ナルナセバ（アートふる山口において）

#### (3) 毛利臣男の原画「山口職人絵」について

「山口職人絵」は、山口に伝わる伝統産業を継承する人や、ものづくりという分野において山口のブランドになる可能性を秘めた人たちが仕事をする様を描くように毛利臣男氏に依頼したものである。毛利氏は2000年からジャパン・ファッションデザインコンテストin山口の審査委員長を9年間務めている。また、第21回国民文化祭・やまぐち2006においてはファッションフェスティバルの芸術監督を務め、モーリ・マスク・ダンスPart12「BLUE MOON」を市民とのコラボレーションによって創作し大きな反響となった。このような山口との縁や培われてきた親しみから、職人絵を描くことを承諾され、墨絵による迫力のある8枚の絵が完成した。

描かれた職人絵は「大内塗」、「山口萩焼」、「ファッション（デニム）」、「和菓子」、「時計」、「水引」、「サンドブラスト」、「畳」の8枚である。市内大殿地区に匠のまちというイメージを創出するために、すでにこの地域で活動している職人ばかりでなく、歴史的にこの地区に縁がある職種や新しい分野を開拓し、追加したらよいと考える職種などを含めて毛利氏に毛筆による線画を依頼した。

毛利氏は我々研究会スタッフとともに、自ら各店舗を尋ね職人の仕事風景を取材した。資料として多くの写真が撮影され、職人絵が完成した。それらは3DCGに取り込まれ、立体的な表現が施された。

この絵を3DCGの動画の中に入れ込み、「職人の世界が展開されるまち」の姿を提案したのだが、その意図するところは、デジタル的なものだけではない、その中にアナログ的なもの（手書きの絵）を入れたところが斬新であり、伝統的なものづくりにおいてもこれまでの慣習や方法を守っていくだけでは面白いものや新しいものは生まれにくい、違ったものを取り入れることでもものづくりにも新しい展開が可能になるのではないかと提案の意味を込めたものである。

全国的にも伝統産業は後継者不足で存続自体が危ぶまれているものが多い。山口市では大内塗りにしても山口萩焼にしても人数や規模の点では家内工業レベルであり、産業というところまでは至っていないのが実情である。これからこうした伝統産業や新興産業をまちづくりのエンジンとして活かし、山口市の経済を牽引するような産業として育てていくためには、まずは

他から抜きでるような個性や特性が必要であり、そうしたものづくりを可能にするものが、ものをつくる人たちのアイデアや異業種間の連携、そして創造性ではないだろうか。

#### (4) 展覧会のためのサウンドデザイン

地域創造の一環として、山口という地域において芸術・文化的側面から実践的な研究としてイベントの企画・運営に参加し、そこでの体験を通じて地域貢献やまちづくりを考えてきた。

しかし、イベントはその性格上、それがどんなにアピール力があるものでも継続的に行わなければ、イベントに込められたメッセージは伝わりにくいと感じた。また、継続的にイベントを行うことは莫大な費用がかかるため、参加費などを徴収し有料とすると今度は集客に苦しむといった問題が生じる。

この経験を通じて筆者にとっては、創造都市に関わる研究者たちの掲げる「創造の場」としてのイベントを単発的に行うことよりも、地域における創造性を生活の中で実践して行くことが魅力的に感じられた。その前提として、私たちが暮らしている山口という地域の「素晴らしさ」や「良さ」に私たち自身が気づき、共通の認識や共感できるものにするのが最も重要であると考えている。それと平行してイベントを行うことで、はじめてまちづくりの好循環が生まれるのではないだろうか。

そこで、そのための手法として私はサウンドスケープという「音」に対する考え方に着目したい。音を感じ取る重要な感覚器官である聴覚は、今まで都市政策を考える上ではないがしろにされてきた。音とは単に聴覚的印象を生じさせる物理現象ばかりではなく、意味を喚起、触発する一種のメディア（媒介）としての機能を持つ。

しかし、特定の地区を対象とした地区特性を活かすための試みは、景観を視覚的に取り扱う事例に比べて、音景観（サウンドスケープ）が扱われる例はまだ少ないのが現状である。私たちは「音」がその土地の魅力を構成する要素の1つであることを忘れてはならない。音も文化とともに歩み続けてきたのだ。

音のデザインを通じて、ここ山口の永い歴史が育んだ文化を捉え直す。それは、視覚的に表される既存のアプローチとは異なる全く新しい方法であると同時に、人々の潜在意識に訴えかけることができると考える。

サウンドスケープとは耳で聴かれる「サウンド」と、風景を意味する「スケープ」の複合語で、音の景色を

意味する。つまり、耳で捉える風景として環境を新たに問い直そうとした思想・運動を示す言葉である。サウンドスケープは、1960年代末カナダの作曲家マリー・シェーファーによって始めて提唱された概念「個人あるいは社会によってどのように知覚され理解されるかに強調点の置かれた音の環境」である。

この用語には、それまで主に視覚的なデザインに関心を払っていた建築家や都市計画家、環境をめぐる各種の研究者など「音楽」を超えた様々な領域の専門家に向けて、「音」や「環境音」を自分自身の問題として意識して行って欲しいというメッセージが含まれている。そこにはさらに、専門家ではない一般の生活者に対しても、日々の生活の中で音を聞き味わうことの喜びを感じてほしいというメッセージ、自分自身の耳を通じて身の回りの環境に潜む問題を発掘したり、その環境のもつ魅力を体験する力を発揮しながら豊かな生活を送って欲しいという、メッセージが込められている。

今回の展覧会のためのサウンドデザインのコンセプトは、「過去と未来を繋ぐ」をテーマに考えた。筆者はまちづくりとは「未来を創造すること」と考えるが、山口にはその土台となる「築き上げられた過去」、つまり深い歴史や文化など財産と呼べるものが多くある。その「過去と未来を繋ぐ橋渡しをする」というテーマでデザインした。

その過去と未来をテクノロジーの視点から音に置き換えると、未来を「デジタル」、過去を「アナログ」としその融合を試みている。デジタルとアナログという捉え方は石田剛氏の三次元コンピュータグラフィックスと、その中に組み込まれた毛利臣男の手書きのイラストにも当てはまると考え、作品に統一感を持たせた。（文責：永留）

#### 参考文献：

- 岩宮眞一郎 『音の生態学—音と人間のかかわり—』  
コロナ社、2000年
- 鳥越けい子 『サウンドスケープの詩学  
フィールド篇』 春秋社、2008年
- 中川 真 『サウンドアートのトポス  
アートマネジメントの記録から』  
昭和堂、2007年

#### (5) 展覧会の成果とまとめ

この度山口市の助成を受けて実施した「大内文化情報発信事業」は、文化芸術の持つ創造性をキーワードに、大内文化という素材を使ってこれからのまちの姿をよりわかりやすい形で発信することを目的に実施し

たものである。さらに制作したものを如何にして市民に伝え、認知してもらうかということが非常に重要であった。

その試みとしては、3DCGの映像を1つのアート作品と考え、芸術文化に興味のある方も対象に5月に市内の文化施設（CS赤れんが）を使って展示を行った（観覧者数120名）。また10月には市内大殿地区で毎年開催されるアートふる山口において2日間限定で展示した（観覧者数60名）。さらには山口市が制作するホームページ上でも静止画データではあったが発信を行った。

展示の期間は延べ2週間、さらにWEB上では現在も内容をアップしているが、展示期間中の来場者の数やホームページでのアクセス件数などから判断すると、一部では熱心な方も居られるが、まだまだ市民のまちづくりへの意識は充分とは言いがたい。また、文化芸術の創造性がまちづくりにつながるという考え方が理解してもらえない人もいた。

全国的に文化芸術をまちづくりの基本に据え政策を立てている自治体は珍しくない。そして創造都市と呼ばれる横浜市や金沢市などの成功事例を比較したとき、山口市が目指す「創造都市」とはこれらの都市とどう違うのか、どう違いを出していくのか。この点をさらに突き詰めていくことで山口市としての創造性が見えてくるのではないだろうか。

こうしたことから、実践的研究の次なる段階での目標は、多くの人々が自ら参加体験することで個々人の創造性を喚起するような機会を提供することだと考えている。継続的な活動の中で少しずつでも市民の創造性が喚起され、いずれはまちづくりに対して大きな影響をあたえる力となることを期待したい。（2.（4）以外 文責：磯部）

#### IV 山口とデニム - 商品開発「藍物語」 -

##### 1. 山口とデニム

今日ではアパレル産業における日本の縫製工場の多くが中国へと移行され、国内の産地は空洞化の一途を辿ってきた。その中で山口県はまれにみるジーンズ縫製工場が多くある県である。株式会社ビッグジョン平生工場は熊毛郡平生町に、ボブソン山口株式会社は豊浦郡豊浦町に、そしてブルーウエイ株式会社P・Dセンターが山口市宮野下にある。国内にあるデニム工場の規模は、山口県が西日本最大であると言われている。

また、山口市内では2006年に、国民文化祭・やまぐ

ち2006で、街じゅうデニムをはじめとする、デニムに特化したいくつものイベントが開催された。また2000年から毎年、ジャパン・ファッションデザインコンテストin山口という、デニムファッションを競う全国規模のコンテストが開催されており、全国のファッション関係者の間では知名度が高まってきている。山口市中心商店街では「デニムDEどうもん」という、市民を巻き込んだデニムファッションの展示イベントが、商店街にある山口道場門前商店街振興組合主催により、国民文化祭以降も開催されている。

産公学連携から地域市民相互まで、幅広くデニムをテーマとした活動が繰り返され行われてきた結果、山口とデニムという関係は多くの人々の認識するところとなっており、デニムは山口の新しい文化であると筆者は考えるのである。

##### 2. 現代のデニムと藍染

現代の国内デニム生産のシェア50%を誇る会社に、カイハラ株式会社（以後カイハラ）がある。カイハラは明治26年に、手織正藍染小幅緋製造を行なう貝原織布株式会社から始まり、昭和45年には、藍染連続染織機（ロープ染色1号機）を自社製作し、ロープ染色によるデニムを日本で初めて市場に供給した。この技術が日本のデニムの質を高め世界有数のデニムと言わしめる要素でもある。

デニム製造の主要な企業は、その他に日清紡績株式会社や倉敷紡績株式会社があるが、カイハラ同様に日本のデニムの原点には日本の藍染の伝統があるのだ。（カイハラ株式会社「沿革」<http://www.kaiharadenim.com/history.htm> 2008年12月13日取得）

##### 3. 藍染の伝統と現代 - 琉球藍と蓼藍 -

藍は世界各地で古くから用いられている植物染料であり、日本には6世紀頃に中国から伝わり、藍色の染料を採る為に広く栽培された。しかし明治時代に入ると、インドからの輸入が盛んになり、藍の作付けが激減した。またドイツで人工藍の工業化が成功し、1904年頃から盛んに輸入されるようになり、現在では日本での藍の栽培は希少となっている。

しかしながら現在も藍の伝統は受け継がれている。日本でわずかに栽培されている藍は、タデ科の一年生植物の蓼藍をはじめ、沖縄にはキツネノマゴ科の多年草の琉球藍がある。その他に北海道には、古来アイヌが利用していた大青が海岸地方に自生している。そして今も、全国で藍染作家たちが藍の美しさにこだわって藍染を継承している。こうした作家たちの中には、伝統的な着物文化と深く結びつき、民芸的な性格を帯



びた作品を作る者や、現代のモードと結びついて活動をしている者などがいる。

筆者はこれまで、自身の服飾デザインにおけるこだわりを主にデニム素材に置き、商品開発の研究創作を行ってきた。それらは、工業製品として作られたデニムが主であった。しかし今回は、デニムの原点が天然染料であったことから、天然の藍染と工業製品としてのデニムを融合させることを考えた。

ちょうど沖縄研究をしている安溪遊地教授（山口県立大学）に、琉球藍の作家を紹介されたので、この好機を活かして沖縄の伝統である琉球藍の染織作家と面会することになった。水谷由美子教授とともに、沖縄県島尻郡のぬぬ工房を主宰している大城拓也氏を訪ね、商品開発に向けたミーティングを実施した。そこで沖縄の琉球藍の伝統と、山口を含む日本各地で用いられている蓼藍の伝統を活かしながら、新しいデニムファッションの開発をする方向性が生まれた。

山口県には藍染めの活動をされている方が展覧会をされており、蓼藍の染色の工芸的基盤がある。偶然にも山口市には山口県立大学のすぐ側に藍場田屋があり、そちらを訪ねて協力を求めた。主宰する田屋富美子氏は、自分が素材を染めて提供することは難しいけれど、自分が長年温めてきている藍瓶があるので、それを貸しても良いと申し出てくれた。これで、琉球藍と山口の蓼藍を融合させる山口流のファッションを創作する条件が整ったのである。そして、デニムファッションの商品開発とプレゼンテーションを行なう研究に取り組んだ。

#### 4. 「藍物語」の商品開発とプレゼンテーション

沖縄を中心に活動しているぬぬ工房の大城拓也氏は、琉球藍の手染めそして手織りのデニム生地を制作している。従来は「BEAMS」や「yen jeans」等のブランドに生地を提供していたが、現在は新しいプロジェクトに参加している。極めて手工芸の伝統に従っており、実際の生地も高価である。

山口を中心に活動している藍場田屋は、着物や和風のアイテムを制作してきた。蓼藍の瓶は長年使用され、また守られてきたものである。このような作家にとって大切な藍瓶を貸して下さるということで、改めて身が引き締まる思いであった。

まず、大城拓也氏の制作したデニムは、精巧すぎてまるで機械で織ったように感じられるものから、手作業による不完全さをあえて残したようなタッチの生地まであった。また、琉球緋の技法を用いた、沖縄の伝統的な模様が織り込まれている生地や、白糸と藍色の

糸がまだらな模様を作り出している生地など、手織りならではのデニムも開発されている。話し合いの結果、手織りの風合いが感じられるまだら模様のデニム生地を使うことが決まり、素材提供を受けた。また、藍場田屋では前述したように、藍瓶を借りて自分で染めることになり、天然繊維のみしか染められないことや、瓶に浸ける時間によって濃淡の変化がつけられるといったアドバイスを受け、それを踏まえたデザインをすることにした。

まずは、琉球藍の手染め手織りのデニムと、工業製品であるインディゴブルーのデニムを組み合わせ、メンズのジャケットと、レディースのベストをデザイン・制作した。

大城拓也氏の制作したデニムは、白糸と藍色の糸をよったものを横糸に使用しているため、裏地にちらついたような独特のまだら模様が表れている。この模様を活かすために、裏地も表に出せるデザインを心がけ、衿、見せかけフラップ、胸と背中部分のモチーフを、藍の葉が生えているようなイメージで造形し、片面に裏地が出るようにデザインした。

琉球藍のデニムに比べ、現代のインディゴブルーのデニムは、やや紫がかかった濃い色をしているため、組み合わせることで3色のグラデーションのような表現ができ、一般的に販売されているデニムジャケットにはない、独特の表情を出すことができた。

次に、藍場田屋の蓼藍を使用した手染め生地を用いて、メンズのシャツと、レディースのスカートをデザイン・制作した。

筆者は藍場田屋の工房で、白の綿生地を様々な形、大きさ、濃淡のむら染めにして素材を制作した。そのランダムにむら染めした素材を、デザインと調整しながらバランスよく組み合わせることで、一点ものの付加価値を付けることができた。

伝統的な藍染である、琉球藍、蓼藍、それに、現代的に工業化された染料のインディゴブルーを組み合わせることで、ブルーの原点に回帰しつつ、未来のデニムクリエイションを志向する商品展開とした。これらの商品のプロトタイプを、「藍物語」という名でテーマ設定した。そして、11月22日に開催された第9回ジャパン・ファッションデザインコンテスト in 山口のショーの後半に計画された第2回ニュークリエーターズコレクションに招待され、そこで「藍物語」を初めとするデニムを用いた作品5点を発表した。その結果、県内外の多くの人々の目にふれさせることが出来た。

今後、量産化を視野に入れて、商品開発として展開していくためには、手染め手織りのデニムが非常に高価であることや、一点ものを思考して自分で染めた生地は、安定的に供給ができないことなどの難点もある。伝統的な手工芸の世界と、工業的な量産志向の融合の難しさを改めて感じさせられた。

筆者は山口からファッションを発信するという立場で、山口の新しい文化であるデニムを、創作活動の重要な素材としてきた。過去には、ジージャンや5ポケットのジーンズなど、スタンダード化しているものを変形させ、既成概念を破壊すると同時に形を見直すものや、古着のジーンズを素材として用い、ジーンズの色落ちの美しさを表現するもの等をデザイン・制作してきた。

今回の商品開発の実験は、20世紀末からジーンズブランドだけでなく、一般のアパレルでも非常にメジャーになってきたデニムという素材を改めて見直すことにある。同時に、ジーンズの藍色の原点に回帰し、伝統と現代を融合させてストーリー性を持たせることで、消費者のデニムに対する認識を豊かにすること、またデニムに対する意識の変化を促そうとするものである。

しかし、伝統的な手工芸を商品化することにおけるコストの問題など、商品化の難しさを感じると同時に、今までに知ることの無かった新たなデニムの可能性を発見した実験でもあった。今後もデニムの可能性を様々な観点から追求していきたいと考えている。(文責：片山)

## V 地域資源を生かした商品開発とファッションショー

### 1. 概要

山口県立大学は2007年から公立大学法人となり、以前にも増してより地域貢献を目指すことが大学のテーマとなって再出発した。かねてより、筆者は山口県では特に大学が所在する山口市を中心に、柳井市や萩市などで地域の諸機関との連携を構築し、ファッションショーを実施してきた。柳井市では柳井縞の会から依頼されてファッションショーを企画運営した。萩市では萩商工会議所と連携し、竹をテーマにしたプロジェクトを立ち上げ、その結果、萩開府400年記念事業でファッションショーを企画運営した。

以上のように地域資源として柳井では伝統的な柳井縞の織物を現代的な視点から発掘し、創造するという活動を実施した。一方、萩では竹産業は衰退している

ものの伝統的に紙や簾などの製造があったが、筆者の場合にはファッションという観点から新しい試みとしてファッションの商品開発と竹をテーマとする芸術作品を創作するという実践を行った。

ファッション産業における素材開発は、ほとんどと言ってよいほどエコロジーがテーマとなっている。2005年にちょうど東レが野村産業に次いで竹繊維開発に関する特許申請をして話題になっている時だった。そこで、東レの大阪本社の広報に素材提供の依頼をして、結果的に大量の爽竹の提供を受け、フィンランドデザイナーと共同で商品開発をした。これは、萩と東京で発表し反響を得たが、実際のビジネスにまでは実現していない。

このように、地域資源をテーマとして、各地域の創造への動機に沿いながら、筆者はプロジェクトの内容を提案し実現してきた。

### 2. ファッションショー「長門峡・北海・ジャポニスム」のコンセプト

長門峡の場合には2007年の秋に長門峡を範囲とする篠生公民館主事の河村龍雄氏から、「伝統的に続いている地元の長門峡もみじ祭りに出演してほしい」という電話を受けた。しかし、急な依頼であったので、筆者自身は取り組むことができずに、学園祭で学生たちが自主的に企画しているファッションショーの作品を派遣することになった。

昨年山口県立大学が受けている文部科学省現代GP(地域の活性化・地元型)事業の一つにファッションショーが組み込まれている。昨年は山口市を視野に入れて、自然が身近であること、また農業に従事する人が多いことなどを考え、スローライフのライフスタイルを提案する計画を立てた。その結果「ルーラルファッションショー」をテーマにして展覧会とファッションショーを開催することになった。この時は、仁保の農家の方や農協関係者の協力を得て、農作業を着想源とする作品を制作し発表した。

日本農業新聞の1面に記事が掲載されたので、ルーラルファッションにおいて開発したモンペファッションが注目を受け、全国からメールが届いたり、下関農協などから反響があった。

本年は、山口市との合併問題があり、山口との関係が身近になりつつある阿東町の長門峡を視野に入れてテーマを考えた。なぜなら、前述したように2007年にファッションショーの依頼があったことと、長門峡に縁がある高島北海が地域活性化および地元という現代GPの課題のモデルとして浮上してきたからである。



高島北海は本名を得三と言ひ、萩に生まれた郷土の人である。明治時代から昭和にかけて世界中を舞台として活躍した。特に1885年から3年間、ナンシー（フランス）の森林学校に留学しエミール・ガレ等、多くのアール・ヌーヴォーの作家に多大な影響を与えたことは美術史あるいはデザイン史の分野で非常に有名な話である。明治維新後、20年足らずの時期に国際文化交流で活躍したこと、さらに生涯に渡り世界各地にかけ多くの業績を残していることから、国際文化を体現した人という理想のモデルとして価値がある人である。

さらに加えて言えば、北海のナンシーでの活躍は、3年間の滞在期間にも関わらずフランス政府から教育功労賞を授与されるなど、公然として評価をフランスで与えられていたことが理解される。彼はまさにジャポニズムの風を吹かせた功労者でもあるのだ。

しかし、国際文化交流と言うと、地域の活性化についてどういう活躍をしたのかという疑問があるだろう。彼は官僚として植物学や地質学の分野で評価され、留学のみならず世界各地に調査旅行にでかけている。当時としては比較できない程の先端的な世界的活動を50歳で捨て、北海は日本画家を目指した。そして、目覚しい芸術文化分野での活躍をした後、晩年になって芸術的才能と、かつて地質学で故郷の地形や植物などを研究調査したことが結実して、長門峡の名付け親となるばかりでなく、名所開発に尽力したのである。つまり、彼は自分が描いた100枚の絵を資金源として、遊歩道を整備し、桜並木を作ったのである。

以上のような理由で、地域の活性化と国際交流という視点から、北海の活躍は一つのモデルとなり、地元山口にとって多大に尊敬し得る存在なのである。しかし、一部の専門家あるいは地元の文化人にしか知られていないのが現状である。そのために、広く新しい話題性を作り、北海と長門峡を併せてアピールすることは価値があると考えた。そのために、「長門峡・北海・ジャポニズム」をテーマとし、地域資源である自然、歴史、人物、芸術文化などをリサーチし、服飾作品とショーによる演出で表現した。

### 3. 長門峡「もみじ祭り」のためのファッションショー

筆者は我々のファッションショーという創造の場あるいは交流の場を、地域における創造的なプラットフォーム作りの一環とみなし、ショーを地域の特徴的な場所で開催してきた。商業的なファッションショーが確実な目的と成果があることとは異なり、文化的な性格が強いファッションショーは、人々の印象には残

るが、ややもすると一回きりのイベント、後には続かないものという印象を与える。

確かに産業と結びついていないと、工業的な商品開発に進まないために、継続性に欠けるという欠点がある。また、メディアを通じて話題は振りまくが、何か形に残らないということで、その価値が低く見られる傾向にあることは経験上、承知している。

しかし、山口で15年間ファッションショーを年に数回づつ継続してきた経験から考えると、ファッションショーを実施するごとに、地域の組織や個人とのネットワークが構築され、その網の目は密度を増した有機的な生物のように機能してきているのも事実である。

また、創作者自身のクリエイションのアピールには役立ち、「やまぐち文化発信ショップ」の延長線で立ち上がった有有限会社ナルナセバのビジネスにおけるイメージアップやレベルを認知してもらうことに繋がってきている。

こうしたネットワークや話題性が県内で徐々に認知されて、各地域からショーの企画・プロデュースや商品開発の申し出を受けるようになってきたのだと考える。長門峡でのファッションショーは2007年に依頼された。そこでは、最初から内容を打ち合わせたものではなかった。他の目的で創ったものをまずは持って行って発表したということで終わったので、観衆に十分なアピールができたとはいいい難い。

そこで、今回はまず我々の活動に興味を持ってもらいたいと考えた。それ故に、具体的に交渉する前からコンセプトを立て、企画書を作成した。つまり、今回は依頼されるのではなく、こちらからもみじ祭り実行委員会に提案して、理解と了解を得る必要があった。

5月から7月の間に、篠生公民館の主事河村龍雄氏と数回の打ち合わせをして、企画書を何度か加筆訂正して、最終的なものを完成させた。それを8月末の実行委員会に提出し、メンバーの理解を得たのである。11月3日午後1時30分から2時30分までの1時間、オープンステージでショーをする許可が得られたのである。

同時に、テントのブースを一つ借りることになり、そこで研究室メンバー岡部隆則が中心になり、生活雑貨の商品開発をして、それらを販売するという実験も行なうことになった。

このことは後ほど岡部隆則が触れるので、話をショーに戻す。

筆者は2002年からクリスマスファッションショーの

中でサンタファッションコンテストを実施して、専門的に創作をしている市民や大学生、専門学校生、そして高校生などの創造的な交流の場としてきた。その経験が第21回国民文化祭・やまぐち2006で生かされ、産公民学のプラットフォームが形成された。その連携基盤を利用して、2007年に山口県立美術館と連携して実施した「アグリ・アート・ツーリズム」で、さらに創作の輪を広げることになる。

その結果、今回の長門峡での構成で、従来から協力関係にあった中村女子高等学校に参加の誘いをした。ちょうど2008年度から同校のライフデザインコースでは、デニムをテーマにして新しい創造教育をしようとしていて、ブルーウエイ株式会社や当大学に別件で協力要請があった。

こうした偶然があり、結果として生徒3名が1学期に制作した浴衣の課題作品をもみじ祭り用にアレンジして発表した。我々のかつてのプロジェクトメンバーであった永富真子が教員としてこのライフデザインコースの服飾デザインの新規プロジェクトに関わり始めたことも偶然である。それ故に、長年我々のプロジェクトに関わってきた山野美智子教諭をサポートして、永富がこのパートの演出・指導を行った。非常に若々しく、またトレンドへの意識をした、素晴らしいパートになったと評価できる。

次に、浴衣に続いて着物ショーを実施することにした。なぜなら日本人はかなり多くの人が結婚と同時に着物を仕立てているが、ほとんどの人が着ることがない。虫干しも兼ねて、地元の方にモデルになってもらい、着物を着る機会を創出しようというという計画である。

全国でこのような着物を着て街を練り歩き、着物を着る機会を創出しまちづくりに成功しているのは、滋賀県長浜市において毎年開催されている長浜出世まつりの一環の行事である。それは長浜きもの大園遊会と呼ばれるものである。

長浜きもの大園遊会は、歴史と文化に彩られた長浜の市街地一帯を、全国から集まった着物女性約1000人がそぞろ歩くという、日本一の着物イベントである。参加者には海外旅行・高級きもの等豪華景品が当たる大抽選会や、まちかどイベントなど様々な催しがある。ホームページの写真を参考にすると、街が着物姿の人で埋まり壮観である。(長浜きもの大園遊会「長浜出世まつり」<http://ns.nagahamashi.org/syusse/enyu/index.html>2008年12月18日取得)

地元山口では、萩市がきものまつりを実施している。

こうした流れの中で山口市でも新しい切り口でやってみようかという構想までは研究室で議論し、山口商工会議所青年部に提案したが、今の段階ではまだ組織を作るところまでは行っていない。

今回のショーでは箆筒に眠る着物を着ようという呼びかけで、阿東町において女性の団体の長をされている松浦富子氏にコーディネイトを依頼したところ、快く引き受けてもらい10名の参加者がじきに決定された。

しかし、モデルは皆が既婚者なので、着物の種類は留袖や訪問着になりパフォーマンスの幅が狭まることから、20代の女性や男性のモデルを起用する構成をすることにした。

地域との共同による創作活動について、着付けのプロでありヘアメイクも担当した西脇末美が主催者や地元の参加者へインタビューしているので、以下で述べる。

#### 4. 地域住民がモデルとなる着物ショー

2008年11月3日に阿東町を代表する長門峡道の駅において第27回「もみじ祭り」が行われた。秋晴れの朝、早くより「もみじ祭り」の裏方となる、地元住民のブラスを出す方々、山口県立大学のショー「長門峡、北海、ジャポニスム」の照明や大道具担当者、そしてモデル総勢50名が集まってきた。その中で、「着物ショー」に出場するモデルの方は17名であった。阿東町の着物好きなご婦人12名と防府市民の2人であった。それに加えて、山口県立大学の女子学生1人と男子学生2人が参加した。

控室はメイク室と着付け室に分かれて熱気満々の空気の中で、YICビューティモード専門学校の2年生3名と筆者とで、モデルのヘアメイクと着付けをした。まるでファッションショーの控室のようだった。

ご婦人方にとってのこの日の着物を着る体験はそれぞれの思いが交錯していたようだ。「近年、着物を箆筒から出すことはない、久しぶりに着物を着る、自分が嫁いで来た頃の着物を着る、何かの行事で作った着物に久しぶりに袖を通した」など参加者が自分で着る着物を懐かしがって眺めているなどの様子を観察した。

参加者同士が会話する様子を見て、着付けをしている筆者も笑みが自然に出てきて、何か良いことをしているように思えた。やはり女性は、老いも若きもない、自分を美しく着飾った時の顔はとても良い顔をしているものだ。特に嫁入り前の女性の振袖姿は鮮やかでその場の雰囲気盛り立ててくれる。

今回の着物はほとんどが、誰かが所有している着物でオリジナルにショーのために仕立てられたものではなかったが、山口県立大学水谷由美子教授が考案した、デニム生地で作った着物（縫製は山口県立大学准教授松尾量子氏）とインドネシアの更紗で作った帯、そして背中に施されたサンドブラスト（るり・あーと制作）の模様などは観客の目を一段と引くものだった。

このデニムの着物にはジーンズで使われる太い黄色のステッチがかけられているばかりでなく、シルバーのステッチ（匠山泊）も入っている。派手さはないが、シックにまとまっていて、デニムにもかかわらず上品な仕上がりとなっていた。

着物ショーに話を戻すと、地域のもみじ祭りという賑やかな一大イベントに参加したモデルはショーが終わってからも、「着物が着れて良かった」、「まだ他にも着物があったのに、そっちを着れば良かった」、「あっちの帯にすれば良かった」などとそれぞれに思いは別なところで多々あるようだった。

日本人にとって、「着物」は親しみやすく、会話がいつもより増え、コミュニケーションの広がりを見せてくれる小道具に匹敵すると考えてもよい。シニア世代とヤング世代の交流の場にもなり、筆筈に眠っている「着物」の虫干しにもなり、出場した地域のご婦人の方の精神衛生にもよい影響を与えたのではないかと。また、地域の聴衆の目も楽しませることができた。こうした着物ショーは芸術文化というよりも生涯学習の一環としての機能を持っているように感じた。

数日後、「きものショー」に出場していただいたリーダーの松浦富子氏に、電話インタビューを実施した。松浦氏は一緒に出場した他の方の意見も集めて下さり、複数の回答を得ることができた。以下に質問とその返事をまとめる。（文責：西脇）

##### 5. インタビューによる主催者と参加者の意見

- 「もみじ祭り」に出場した感想は。  
皆さん「すごく良かった」です。来年もまた、出たいですね。
- お友達は来ておられましたか。  
家族と孫、仕事場の同僚、お友達もたくさんの方が声援してくださり、見学にも来てもらったので大変、嬉しかったです。
- 「きもの」はどんな着物をお召しになられましたか。  
訪問着です。中には「付け下げ」、「無地」の着物の方もおられました。

- あなたは「きもの」に対してどのように思っていますか。

私がお茶会等で普段からよく着ますが、きものを着ると心が引き締まり、おちつきます。私にとってきものは生活の中で無くてはならないものです。

- 「きもの」の虫干しになりましたか。  
普段から着慣れておられない方にとっては虫干しの良い機会になったのではないかと思います。
- 観客の皆さんの前で着物を着て歩いて自分の姿を見て頂くのは恥ずかしくなかったですか。  
恥ずかしくは、ありませんでした。むしろきれいに見てもらいたいという気持ちの方が強かったです。

以上のインタビューから、今回のモデルをした人の中には普段から着物が好きな人、あるいは生活の中に着ることが組み込まれている方がおられ、見せることの喜びが感じられた。

このような地域住民と大学とのコラボレーションについて、もみじ祭り実行委員会の主催者にインタビューを実施した。

篠生公民館長岡田隆広氏にまず以下のような聞き取りをした。

- 昨年の「もみじ祭り」と、今年を比較してどのように感じましたか。

「去年よりも数段、よかったよ」、「人も去年より多かったし（20%増）、ステージに釘付けになっている人がお多かったよ」、「ステージから離れる人がすくなかったよ」

「去年は、観客もバラバラだったよ」「去年は県立大学生のファッションショーをやってもらったのですが、地域の方との一体感がなくて、何をしているのかなと言う感じだった」「水谷教授の解説があったのでわかりやすかった。去年は説明がなかった」、「地元の出身である高島北海を取り組んだショーだったのでより広めていただいていたと思います」「もう少し長い時間ショーをやってほしかったです」

「もみじ祭り」の実際の運営リーダーである河村龍雄篠生公民館主事にインタビューをした。

- 昨年に比べて今年はどうな感じでしたか。  
「去年は打ち合わせする時間も短かったので、なんとなく終わってしまったと言う感じだったが、今年度は当初から水谷由美子教授と打ち



合わせをしていたので、充実できる内容になるのではないかと考えていました。実際、結果は素晴らしかった、「水谷教授のナレーションが入っていてよかった。メリハリがあって大変よかった」、「去年と同じファッションショーを今年も行うのは大反対だと言っていた人たちが、今年は早くより県立大学の水谷教授と郷土出身の高島北海を絡めて打ち合わせをしているので、今年もやりましょうと賛成になった」

今回のショーは以上のような主催者側の話から、篠生公民館主事河村龍雄氏の力添えで実現したに違いない。ショーを見た関係者の方々には「良かった」「やって良かった」と、いただいていたそうだ。河村氏によると地域の力だけでもみじ祭りを活性化するには限界がきている。「山口県立大学のコンセプトが地域貢献、地域交流を前面に出しておられるので篠生公民館から山口県立大学江里健輔学長に、是非みじ祭りにファッションショーを実現できるように理解と協力をお願いする要望書を、学長宛に提出しました。高島北海のことをもっと知ってもらいたい。地域が誇る人物だから」

さらに河村氏は以下のようなコメントを残してくれた。

「水谷教授のプログラムの構成は素晴らしいですね」「開催後、地域の方が公民館を覗かれては“見たよ”と同一の話題が多かったです」「その後、いろいろな行事がありました地域住民の人とのコミュニケーションが円滑になった。公民館側が随分、助かっています。住民に以前より協力していただける度合いが多くなりました」「今回のファッションショーをしていただいて、篠生地域が得たものは大きいです。こういうことから地域がまとまっていくのでしょうかね、改めて県立大学さんに感謝を申し上げなければいけませんね」さらに「熱いうちに又、何かコラボレーションしたいですね」

地域の住民が地域の「祭り」に参加し「祭り」を盛り立てるエッセンス役になることで、迎える側、行動を起こす側にとっても双方に良い影響を与え、地域活性につながっていくまち興しにも繋がるのではないかと考えます。

アンケートに気持ち良く答えて頂き、この「ファッションショー」が地域の方々にとっても、学生さんにとっても、非日常の気持ちの良い一日が過ぎせたのではないかと思います。それ以上に行事を通しての地域貢献、地域交流について身をもって実行した喜びを多大に感じ

取ることができた。(文責：西脇)

## 6. ショーの運営・演出・結果

ここでは上記と少し重複するがショーの構成に従って、運営・演出・結果について記す。

### (1) Part1 中村女子高等学校

中村女子高等学校の生徒には、アレンジ浴衣を3点お願いした。同高校の普通科ライフデザインコースでは、被服製作の授業を通して浴衣の制作を行っていた。そして今回のショーのために、秋仕様にアレンジを施していただいた。何度もミーティングを重ね、ショーのコンセプトである「長門峡・北海・ジャポニスム」から外れず、なおかつ女子高生の新しい感覚と個性溢れる感性を十分に取り入れた作品に仕上がった。

実際のショーでは、傘で身を隠すように登場することで日本女性としてのつつましさ、優雅さを表現した。さらに彼女たちの武器ともいえる若いエネルギーを感じてもらうために一歩一歩を軽快に、そして力強く踏みしめた。溢れるほどの元気を持つ彼女たちの姿には、観客を笑顔にさせる力があつた。

### (2) Part2 タンスに眠っている着物を着よう

阿東町民12名、防府市民2名に山口県立大学生3名を加えた17名で着物ショーを行った。始めに20代の女性2名と男性2名が登場する。まず女性を挟むように男性が両脇に立つ。中の女性は袖を広げ、その場でゆっくりと回る。その間に両脇の男性は、ステージに円を描くように悠々と歩く。袖を広げて回る女性は、まるで袖を振っているかのようだ。男性がその周りを歩くことで、若い男女の関係性を象徴する演出が完成する。男が女を振り回しているように見えるが、実は女が男を操っているのではないだろうか。

続いて、40～70代の女性13名による着物ショー。テーマは「タンスに眠っている着物を着よう」である。本番当日に初めてモデルと会うということ、モデルが高齢であることもあり、凝った動きは一切せず、その代わりにステージの下に降りてもらい、客席の目の前まで来てもらった。そこで横一列に並び、袖を広げて回る。単純な動きだが、13名が目の前で一斉に回る姿は圧巻であった。

このパートは中村女子高等学校生、阿東町民、防府市民の方々そして山口県立大学生及び同大学院生と共に長門峡の伝統的な祭りである「もみじ祭」の中で開催するという、普段とは違った形のファッションショーであった。しかし普段とは違っているからこそ、そこに魅力を持たせたいと考えた。また、学外での交流ということもあり、山口県立大学として恥ずかしく

ないものを見せる必要があった。今年限りの参加であるかもしれないが、決して「やり逃げ」はしたくなかった。そしてそのためには、いかに我々と地域住民との距離を縮めるかが重要だと感じた。また、舞台装置にも趣向を凝らした。もみじ祭りの雰囲気を壊さないように派手なモノは設置せず、格子の前に高島北海の絵3点という舞台にした。

結果として、たくさんの拍手でショーを終えることができた。もちろん、参加者も満足するステージとなり、素晴らしい思い出となったに違いない。特に阿東町の方は地元ということもあって、ショーが終わった後も着物のままで祭りを楽しんでおられた。友人との会話も弾み、普段とは違う「見る」「見られる」関係も味わえたと思う。祭りのアトラクションとしてではなく、今回のファッションショーは地域の高校生や地域住民が参加したことで、祭りを内側から活性化させることにもつながった。(文責：森田)

なお、ショーのプログラムは以下のとおりである。

#### Part.1 もみじ祭り－浴衣と着物 20点

- 1) 中村女子高等学校 アレンジ着物 3点
- 2) 阿東町民・防府市民・山口県立大学生による着物ショー 17点

#### Part.2 山口県立大学生によるファッションショー「Chomonkyo－HOKKAI－Japonisme」 30点

- 1) もみじの精 5点
- 2) 高島北海がナンシー（フランス）に留学していた頃から19世紀末頃のパリファッション 7点
- 3) 衣造形の原点 ○&□からの発想 4点
- 4) 日本の美意識から発想を得た服飾デザイン作品 9点
- 5) 第2回 山口県総合芸術文化祭 メインフェスティバル 創作舞台公演「長門鯨回向外伝」漁師衣装 5点  
フィナーレ

#### 7. もみじ祭りのブースのための商品開発

もみじ祭りにて長門峡で販売できるような商品開発を企画した。長門峡の「もみじ祭り」に来て気軽に買い求められる商品という事で、価格を低く抑え、女性や家族連れといった客層をターゲットとして開発した。また、既に「もみじ祭り」にて地元の人たちが毎年出しているような販売商品とは衝突が無いような商材を考える事も考慮した。

色々な候補の中から女性や家族連れ、また長門峡でのピクニックや散歩といったイメージからシュシュ（髪留め）とランチョンマットの2商材に絞った。商

品デザインとしてはシュシュを赤羽唯（山口県立大学生活科学部環境デザイン学科3年）、ランチョンマットを真鍋廣重貴（山口県立大学大学院国際文化科学研究科1年）が担当した。2つの商材で生地質感やカラー・模様といった要素で長門峡での四季や豊かな自然等のイメージを盛り込んだ。また、シュシュは取り外し可能なリボンをつけるなどして、小さな子供や若い女性が喜ばれるような工夫をした。ランチョンマットでは、ピクニックに持っていけるような大きさにし、中に箸・スプーン・フォーク等を収納できるような帯をつける等の機能的工夫をした。当日は、こちらの予想以上に好評で想定していた個数より多くの販売数があった。

長門峡のイメージから、日本の情景などの情緒を大切にしつつも、シュシュやランチョンマットといった現代的で新しい商品を開発する事ができ、地元内外から祭りに来場された人々の手に渡す事が出来たことは非常に有意義な事であった。

ランチョンマット30枚（単価500円）、シュシュ60個（単価300円）を製造した。祭り会場のテントでの販売ということもあり、価格を低く設定したために完売することができた。来客の感想は、「かわいい」「安い」「便利」などの感想を得た。臨時の場所での商品開発ではあったが、タグのオリジナルデザインも施したので、値段の割りに本格的な商品のプレゼンテーションができた。(文責：岡部)

#### 8. まとめ

地域との共同プロジェクトを実施する時に、地域にある課題や資源を生かすことが上記の内容からいかに重要かが理解される。もちろん、ファッション創作に意欲を燃やす若い学生たちの興味を、地域にもっていくことは簡単ではない。しかし、オリジナルを創作する時に一つの手段として、有効な方法の一つであることは事実である。

筆者への賛辞が上記で記されていて、自己演出と思われる恐怖をあえて避けて掲載しているのは、地域資源をいかに創造して発信して行くかは、計画の段階から双方が意見を出せる余地を残しておくことが大切だと改めて認識したからである。この余地を両者の話し合いでクリエイティブに詰めていくことによって、主催者と提案者、また地域住民と大学が心を通わせることが可能となるのだ。

最後に付け加えると、今回の着物ショーのパートは、着付けとヘアメイクを山口県立大学側がすべて行ったことから、地元の方の参加が容易になったことは事

実である。現在では着物を自分で着られる若者は非常に少なくなっている。ある程度、年配の方も同じかもしれない。それ故に、すべてプロにまかせることになり、一般的には着物を着るために高額な費用が着付けやヘアメイクに発生することが着物離れを起こしていることも事実である。

蛇足であるが10月12日から19日までカタールの首都ドーハにあるヴァージニアコモンウェルス大学カタール校に「着物の伝統と継承」と題するプロジェクトで、講演と着物ショーをするために招待され、学生とともに訪問してきた。

アメリカのリッチモンドにある大学が、カタールに誘致されて創設10周年記念を迎えたお祝いの企画である。これは駐カタール日本大使館の北爪由紀夫大使と裕子夫人の企画とも言える。

この時に駐日本人会の方々を着物ショーのモデルを引き受けた。そこで最後に、聞いた言葉が印象的だったので記しておきたい。「今まで着物をきちっと勉強するように親に言われていたがなかなかそのきっかけがつかめなかった。しかし、今回、着物ショーのモデルをして、着物を着る魅力を感じた。これを機会に是非とも着物について勉強し、自分でも着られるようになりたいと思います。」

日本人は着物文化を精神的な拠り所と考えているが、身近でないとか着る機会がないという理由で敬遠している。まずは着物を着る機会を作り、その美しさに触れ、着た時の精神性を味わうことで、本当に心から着物を着たくなるのだと思う。

やはり、着物が日本人のアイデンティティであるので、表面的な美しさだけでなく、色や文様の美についても深く理解されるような環境を提供していくことが大切だと考える。(4.5.6.7.以外 文責：水谷)

## VI クリスマスファッションショー Vol.VI 2008 [Japonisme HOKKAI Chomonkyo]

### 1. ファッションショーの概要

このファッションショーは山口県立大学が昨年度から取り組んでいる文部科学省現代GP（地域の活性化・地元型）の支援を受けて実施したものである。2008年12月21日に山口県立美術館で実施されたクリスマスファッションのテーマは「Japonisme HOKKAI Chomonkyo」で、長門峡「もみじ祭り」で実施したショー「Chomonkyo HOKKAI Japonisme」の姉妹編であると同時に発展形として、内容を深化させて発表したものである。

すでに述べたが北海は長門峡の名所開発に自分の絵を100点売って資金にした。その時の水墨画3点のコピーが、篠生公民館の管理下にあり、それを長門峡のショーの舞台装置として借用した。今回、山口県立美術館では美術館所蔵の北海による水墨画の画像を借用し、舞台装置として使用した。

昨年に続き山口県立美術館のロビーを発表会場としたのだが、この空間のユニークさや魅力を演出することはできたのだが、狭いために観客には不満もあり反省するところである。(文責：水谷)

### 2. ファッションショーの演出・運営

コンテストとショーの2部構成である今回のファッションショーは、それぞれ35作品、34作品という大規模なものであった。そのため、観客を飽きさせない演出が課題であった。

まず、コンテストとショーの間に5分間の休憩を挟むことでお互いが独立している状態をつくった。そして、バックミュージックにも大きな変化をもたせた。コンテストでは、院生の永留靖洋によるサンタDJを起用した。個々の作品によって曲を流すのではなく、コンテストを一つの作品と見立て、その中での変化をDJの操作によって演出した。これによって、35個の作品を見たのではなく、コンテストの中にある35のアトラクションという印象を与えることが出来た。前半ということもあって、間延びしないよう努めた。

休憩の間にはリラックスとリフレッシュ効果のある曲をBGMとして流した。一日で70近い作品を見るわけだから、観客を疲れさせないということにも気を使った。ショー終了時に感じる疲労感よりも満足感のほうが上回らなければ、それは成功といえないからである。

ショーではコンテストとは反対に、個性を出す演出を心がけた。ショー全体のテーマである「Japonisme HOKKAI Chomonkyo」はもちろん意識しながらも、各制作者それぞれのコンセプトも十分に表現した。ウォーキングはスタジオ・レイを主催するREI・KO氏、馬田禎子氏に指導を依頼した。基本的な型を習いつつも各パートの個性に合わせた指導も受け、それぞれに発展させていった。時間配分は作品ごとではなく、パートごとに分けた。これによりステージ上での滞在時間が長くなり、ステージ上でモデル同士のコミュニケーションも可能となるなど、表現の幅が広がった。また、選曲も制作者と共に行なうことで演出の相乗効果を狙った。このように、制作者・モデル・演出家によって一つのパフォーマンスを完成させた。(文責：森田)



なお、プログラムは以下の通りである。

クリスマスファッションショー Vol. VI 2008

Part.1 サンタファッションコンテスト

Part.2 クリスマスファッションショー

- 1) ナルナセバコレクション
- 2) 中国 青島大学紡績服装学院コレクション
- 3) ジャポニスムの風
  1. French Shadow 北海が見たデイドレス
  2. Adjustable Dream 着物から着想されたパーティードレス
- 4) 日本の美意識から着想を得た服飾デザイン
  1. うつくし
  2. 「いき」の精神に基づくコンテンポラリーデザイン
  3. 身体と無常

フィナーレ

### 3. エクステリアでの照明とサウンドデザインの提案

#### (1) エクステリアでの照明

ショーの開催日である12月21日は、山口県立美術館主催の特別展示「運慶流」の最終日であったため、舞台設営が非常に困難であった。最終日には来場者が駆け込むことが予想されるため、通常17時に閉館するところを17時30分まで遅らせたのである。ショーの開演時間は19時であり開場時間は18時30分であるので、1時間で舞台設営を終えなければならなかった。もちろんリハーサルも行う予定であったが、それは前日のみということとなった。1時間で照明、音響、ステージを設営し、さらには客席、受付、モデルの待機場所を設置するというタイトなスケジューリングによって、決して良い意味ではないスリルを味わうこととなった。唯一の救いであったのは、美術館と交渉することによって機材搬入の時間を17時からできたことである。

しかし、仕込みの時間は短かったが照明効果に妥協はしなかった。会場である美術館に入るまでの照明に、その気持ちが現れていたであろう。ファッションショーでは、日常では決して着ることがないような服が次々と登場する。そのため、現実とは違う異空間といっても良い。その異空間へ観客を導くために、照明によって入り口を彩る計画を立てた。前日に計画通りのシュミレーションをしたが、当日は雨となりすべてエクステリア照明は実現されなかった。

計画をもう少し詳細に記しておく。「日本のクリスマスは山口から(日クリ)」の期間中ということもあって、美術館周辺のパークロードにはすでにイルミネー

ションが設置されていた。それにマッチするように美術館へ上がる階段に灯体を置き、階段を浮かび上げさせた。ここで重要なのは、階段に光を当てるのではなく、階段を光らせることだ。単純に上から階段に光を当てるのでは段差が陰になってしまい、それでは現実世界と変わらない。光る階段を登らせることで、非日常的な空間に来場者自らが近づいてくることを演出したのである。また、入り口にある柱にも照明効果を加えた。柱の真下に灯体を設置し、下から見上げるような光を当てたのである。まっすぐ真上に伸びる光によって、柱から硬さが無くなった。ここが入り口であると言わんばかりに際立った光の柱が完成した。

今回のファッションショーは「日クリ」のイベントの一つとして開催されている。美術館の周辺でも様々なイベントが催されているため、全体を盛り上げるための照明効果も施した。美術館の入り口上のレンガ壁に「日クリオリジナルピンバッチ」のデザインを照明によって映し出したのである。この演出には「日クリ」が盛り上がることで、ショーも盛り上がるのだという気持ちが込められている。ショーだけで独立するのではなく、たくさんの協力者のおかげでこのような素晴らしいファッションショーが開催できたのだという気持ちを表現したのである。(文責：倉田・森田)

#### (2) サウンドデザイン

ファッションショーのためのエクステリア・サウンドデザインのコンセプトは「静かなる時代の息吹〜スクラップアンドビルド」である。

北海が活躍した時代はヨーロッパではアール・ヌーヴォーの芸術運動が盛んに行われていた時代であったことから、アール・ヌーヴォー様式と深い関わりを持っていると言われているドビュッシーの作品を引用することにした。

円熟期の作品「映像」から最晩年の「12の練習曲」に至るドビュッシーのピアノ音楽は、特にアール・ヌーヴォー様式と深い関わりをもっている。色彩感溢れる響き、断片的なフレーズの織り成す精緻な「美」の世界を表現しており、晩年に至っても常に新しい思考・書法を試みながら変化を遂げた。(アール・ヌーヴォー「ドビュッシーピアノ作品集Ⅲ」中井正子<http://www.kojimarokuon.com/release0709.html> 2008年12月15日取得)

特に着想を得た作品は代表作である「映像 第1集」から「水の反映」、前奏曲集第2巻第12曲「花火」である。それらのフレーズをサンプリングし、タイトル「水、反映、花火」という言葉に着想を得て、細かく

切った音を基に新たなフレーズを組み直した。また、ある一定の時間まで再生すると、時間を遡るように波形が逆再生される。それは、かつてアール・ヌーヴォーが既存のアートに一石を投じたころの時代の蠢きを予感させ、会場前に音を耳にすることで、訪館者のショーに対する期待感が高まると同時に、ファッションショーのテーマ「Japonisme HOKKAI Chomonkyo」に即したりソースをパルプのように噛み砕いた「スクラップ」から、新たなものが生まれる「ビルド」を表現している。

このサウンドデザインは、実際に外に設置したが照明と同じく雨に妨害されて、ほとんど効果がなかった。そこで、最初の客入れの時や一部と二部の間の休憩時間に挿入することにした。

参加者に感想を聞いた。「場を繋ぐ音としてはかなり良かったと思う。何も無いときよりファッションショーの緊張感がでるし緊張感を感じた」「ショーの派手なビートと対照的で空気も引き締まったと思う」「開演前に流れていたのは良かったが、休憩の時間にあの妙な緊張感はちょっと変な感じだったので、休憩時間はなくても良かったかなと思う」

筆者の思いでエクステリア用にデザインした音をインテリアの中で流したが、急な変更で全体の音環境に関するディレクションにおいて工夫することが必要だったと反省している。(文責：永留)

#### 4. まとめ

2002年からクリスマスファッションショーとして続けてきたが、今年は日本のクリスマスは山口から実行委員会が立ち上がり、はじめて地域のクリスマスの催しと共同しようという会議が催された。12月21日の日曜日にあらゆる催しを集めて、日本のクリスマスは山口から始まったという歴史と山口固有のクリスマスイベントに関する発信力を高めようとしたことは非常に意義があった。当ファッションショーも当初は1月を予定していたが、山口県立美術館の協力で「運慶流」の仏像の展覧会の最終日という条件下で、この日に実施することになった。

当ファッションショーの当初のコンセプトも、やはり大内時代に日本で最初のミサが行われたという根拠に基づいてはじめてのものである。全国ではクリスマスシーズンに光の造形によって賑わいを見せているが、山口が同じように光の空間創りの規模を競っても意味がないと考える。

むしろ今回はじめて市内の産公学が歴史的な根拠に基づいて連携したことはかなり評価できることであ

る。今後、この活動が市民の創造的プラットフォームの創出に大いに役立ち、見て楽しむだけの機会ではなく、市民がいろいろな場面で参加し、創造活動をするという企画がますます意味を持つように思う。

我々のファッションの創作活動がその一助となればと考える。また、商品開発の研究を暖め、実際に山口の人々に山口発のファッションを着てもらおうべく研究をして行きたいと考える。(文責：水谷)

## VII サンタファッションコンテスト2008 - 山口県内での新しい服飾文化の創造・発信一

### 1. 地域における服飾創造の機会の創出と規模の拡大

山口県立大学服飾研究会では、2002年より地域の歴史文化に学び地域とともに地域文化の活性化を図ることを目的として、クリスマスファッションショーを開催している。

このファッションショーではこれまでに瑠璃光寺、野田神社能楽堂、商店街の魔法の屋根、そして常栄寺雪舟庭など地域の特徴的な場所において開催しており、その場所のもつ精神性や特徴を理解し発信するファッションショーとして評価されている。また、このファッションショーは同時に山口という地方にあってファッションという創造活動の発表の場としても貴重な機会を提供している。

山口のファッションコンテストとしては、山口県繊維加工協同組合が中心となって行っているジャパン・ファッションデザインコンテストin山口が著名であるが、このコンテストはプロを目指す若者をターゲットとし、ファッションデザインというクリエイティブな要素を強くアピールすることで産業のより一層の活性化を図ることを主な目的としている。そのことから、ファッションには興味はあるが、まだ将来の道としては決めかねているような学生達にとっては敷居が高いことも事実であり、もっと気軽に自分の力を試すための機会としての役割もクリスマスファッションショーはもっている。

今回、筆者が関わるサンタファッションコンテストは、これまでのクリスマスファッションショーの中でコンテスト部門として実施していたものを、バージョンアップするものである。主な変更点としては、①作品応募の対象を市内のクリエイターなどの限定された人から、一般公募をかけ県内の高等学校や個人・団体等に広げたこと②コンテスト運営の実行委員会を立ち上げ、県の地域文化活動支援事業の助成を受けることで応募者への制作費の一部助成や入賞者への副賞の交

付などを可能とし、プロによる審査とともに参加者のモチベーションを高め、コンテストそのものの価値をあげるといった点である。

## 2. サンタファッションコンテストの演出・運営

このコンテストは、日本のクリスマスの発信元である山口での、共通テーマを県民参加型ファッションコンテストでアピールする役割も担っている。西洋文化をいち早く取り入れた山口の歴史や大内氏の文化を再発見すると共に、市民レベルで親しみやすいファッションコンテストを行なうことによりファッションへの関心を高め、山口からファッション芸術を発信できるようにしたいと考えた。

コンテストの参加者については地元で活躍する作家作品の他、ファッションコンテスト形式で高校生等、一般の県民まで幅広く公募することにした。また、一般の人々に無料で入場していただき見てもらうことで、より身近にファッションを感じ、親しみを持ってもらえるようにした。審査員については、空間演出家の毛利臣男先生等全国規模で活躍されている専門家や地元ファッション専門家などをお願いすることにより、コンテストの水準を高めるとともに、将来的にファッション業界に志す人たちのチャレンジの場となるような親しみやすいイベントになるように計画した。コンテストの公募を実施してみると予想以上の反響があり多くの応募があった。

当日はまず午後2時30分から商店街中の特設ステージで第1次審査をした。ここでは寒さの中、モデルたちは自分の作品のイメージを存分に表現した。しかし、リハーサルがほとんどないまま本番であったことから、時間の感覚をつかめずにあっという間に表現が終わった出演者もいて、リハーサルの重要性を改めて感じた。

本番では番号札を持たない演出で、自由に伸びやかなパフォーマンスを可能にした。全体のグレードが高く、今回のサンタファッションコンテストを機に県内のファッション芸術分野に関わる団体や個人のネットワークを強化し、継続的なイベントをするための組織作りの足がかりが確実にできたと評価できる。(文責：岡部)

## 3. 実践の成果

これまで筆者は国民文化祭でファッションフェスティバルに関わったことで、地域住民との創造ネットワークを構築してきたが、このサンタファッションコンテストでは、改めて幅広い年齢層や多くの組織の参加を得た。

文化の振興を図るには、“本物”“一級品”といったものと出会うこと、また多くの人々が文化芸術活動に参加することで、すそ野が広がっていくことが重要となる。研究創作活動を通して、市内の老人会や子ども会、大学や高等学校、そして商店街など、日頃は文化活動とは無縁かもしれない多くの人たちに創造活動・創作活動を体験してもらう機会を創出することができた。このことは非常に意味のあることであり、文化活動を通してこれらの構成メンバーとのネットワークを構築できたことは大きな成果であった。

また、事業を実施するためには財源の確保は避けて通れない課題であるが、その手段として行政や企業等からの資金の調達は非営利な活動を行う上で欠かせないものである。こうした活動の社会的使命を社会に訴え、社会からの支援を呼び起こさない限り、事業は経済的にも社会的にも成立しない。

今回の研究で行政からの助成を受けて実施できたことは、その事業の社会的意義が一定の理解を得たことの証左となる。こうした非営利な文化事業をプロデュースするには、その事業に対して社会が一体何を必要としているのかを鋭くつかみ、提案していくことが重要となる。

今回の35点の作品のレベルを見ると、サンタファッションコンテストが決して生涯学習のための活動ではないことは歴然としている。創る人の服創りへの興味の角度や技術そしてキャリアも異なっていることは事実であるが、そこには「クリスマス」をテーマにした共通の夢が表現されていた。作品のレベルはかなり高く、地域の服飾芸術の発展が期待される。(1+3 文責：磯部)

## Ⅷ 中国青島大学紡績服装学院との共同ファッションショー

山口県立大学は2004年に中国青島大学との学術提携を結び、教員や学生の交流について協定が締結された。そこで、2005年からまずは青島大学が山口県立大学を訪問し、副学長がファッションを担当している筆者を訪ねて、今後への期待を表明して帰国した。そして、2006年には当大学の代表団の中に当時4年生であった片山涼子が、ファッションのプレゼンテーションに招待され発表した。筆者も他の同僚と参加した。

そして2007年には青島大学の学生が当大学でプレゼンテーションを行い、2008年6月に本格的に交流が始まる。今年6月に大学院生の片山涼子と学部4年生の石橋昌子、萩元由佳、田村未奈美の3名が、2008年6



月3日に青島大学主催の卒業制作発表ショー（青島グランド・リージェンシ・ホテルにて）に参加した。

ここでは、こちらの発表の課題として、まずは日本らしさや山口らしさを意識して、ジャポニズムをテーマにした着物生地とデニムを使用した作品20点を発表した。

そして、2008年のクリスマスファッションショーに青島大学の学生2名を招待することになり、充実した交流を図ることになった。引率された指導者は紡績服装学院の副院長馬建偉教授、服装芸術デザイン学部副主任の秦清徳准教授である。服装デザイン専攻4年生の徐珊氏と同専攻3年生王鈺氏がそれぞれ「青雲出岫」と「星空」をテーマに4点ずつの作品を発表した。2名の学生の作品コンセプトを聞くと、中国の古代の詩や思想が根底にあり、表面の造形だけでは理解できない精神性が理解でき、交流の成果と言える。

本学の学生の作品や発表形式に関して、秦氏は終了後の交流会で音楽と合わせゆっくりとした動きや空間の使い方で、作品の持つ意味を表現することに成功しているし、これから青島大学側でも学んで行きたい点だと感想を述べた。

作品を通したコミュニケーションは、言葉を越えた

世界で感動を共有することが可能である。一方で、作品が生まれてきた背景などをより深く理解する上では、互いの文化を知る必要があり、実際に深い心のふれあいができる国際文化交流が必要であると痛感する。（文責：水谷）

## 区 まとめ

以上、2008年度に実施した地域資源の発掘・創造・発信の実践的研究の事例を紹介した。今後はこれらの事例をさらに繰り返しながら、それぞれの事例の実行において生れたものは何かを見極め、それを次に繋げていけるようにする必要がある。

また、ファッションとまちづくりそして国際交流は一般的には別々のものとして今まで行われてきている分野であるが、筆者のグループは大きくは服飾文化を中心にそこからファッションを発信する、創造的なまちづくりに貢献する、さらに同時に国際交流を実現することを目指してきたのである。

今後も継続しながら一過性のものではない、地域に根ざした運営の制度を構築するとともに、国際的な創造的交流の継続的な方法を作っていくことが期待されている。今後の大いなる課題である。（文責：水谷）



1 三次元コンピュータグラフィックスで表す  
“ちーと未来の山口” 展示会風景  
企画・プロデュース：礒部素男（大学院2年）  
水谷由美子  
サウンドデザイン：永留靖洋（大学院2年）



2 3DCGによるまちのイメージ図  
制作：石田剛



3 毛利臣男「山口職人絵」ナルナセバ



4 藍物語 レディースベスト・スカート  
片山涼子  
(有限会社ナルナセバ・大学院2年)



5 藍物語 メンズジャケット



6 藍物語 メンズシャツ





7 もみじ祭り 着物ショー  
モデルは地元長門峡の婦人たち  
着付け・ヘア：西脇末美



8 もみじ祭り デニム着物  
企画・デザイン：水谷由美子  
デニム提供：カイハラ株式会社  
デニム着物制作：松尾量子  
ステッチ：匠山泊



9 カタール着物ショー (背鳳凰模様)  
サンドブラスト：るり・あーと



10 クリスマスファッションショー Vol. VI 2008  
企画・総監督：水谷由美子  
演出：森田聖士  
テクニカルアートディレクター：倉田敏生



11 サンタファッションコンテスト  
企画・総監督：水谷由美子  
プロデュース：磯部素男  
プロデュース・演出：岡部隆則  
テクニカルアートディレクター：倉田敏生



10 クリスマスファッションショー Vol. VI 2008  
徐 珊 (青島大学4年) 「青雲出岫」



11 クリスマスファッションショー Vol. VI 2008  
王 钰(青島大学3年) 「星空」